

- 【プログラム】 13:30 主催者挨拶
13:45 人権をテーマにした作品表彰
14:00 DVD上映と製作者インタビュー
15:15 人権について考えるトーク
16:40 閉会あいさつ

【内容・登壇者】

- 高校生による人権をテーマとした作品の表彰と作文朗読
 - 受賞者 優秀賞 東京農業大学第三高等学校 2年 岩田怜子
 - 優秀賞 北海道釧路湖陵高等学校 2年 西山千尋
- 演劇「希望の詩」DVD上映（「H I V人権ネットワーク沖縄」製作）
- 同上 製作者・出演者インタビュー
- 人権について考えるトーク
 - コーディネーター：金子 良夫（日司連人権委員会委員長）
 - 登壇者：比嘉 正央（沖縄県総合教育センター指導主事/H I V人権ネットワーク代表理事）
 - 小海 範亮（弁護士）
 - 金城しおり（演劇「希望の詩」出演者/シンガー・ソングライター）
 - 岩田 怜子（作品受賞者/東京農業大学第三高等学校2年）
 - 西山 千尋（作品受賞者/北海道釧路湖陵高等学校2年）
- ミニコンサート：Siori（シンガー・ソングライター）

【開催結果】

はじめに、人権をテーマとした作品募集結果の優秀作品の表彰式が行われ、日本司法書士会連合会の中村邦夫会長より表彰状と副賞が授与され、受賞者がそれぞれの作文朗読を行った。次に、ハンセン病やH I Vに対する偏見や差別などをテーマにした演劇「希望の詩」がDVDで上映され、劇の製作者・出演者らにインタビューを行った。

* * *

「人権について考えるトーク」では、作品受賞者の高校生（岩田怜子さん、西山千尋さん）から上映された演劇DVDの感想や自身の学校でのH I V教育の現状などが報告された。

比嘉教諭からは、自身の子どもの頃と比べて、現在の子どもたちを取り巻く性の環境や情報量が大きく変わっていることが中・高校生アンケート結果等をもとに報告され、親や教師が子どもを信頼しつつも、授業などで正しい知識を伝えていくことが大切だと述べられた。

小海弁護士からは、弁護士界としてはH I V訴訟等において国の責任を一定程度認めさせるなどの成果をあげてきたが、弁護団は単に裁判に勝つことが目的ではなく、「問題を社会に知ってもらいたい」「国の政策を変えていきたい」との意思をもって活動している、と報告された。また、

若い人たちの問題であるからこそ、若い人たちにぜひ考えてもらいたい、と述べられた。

次に、身近な人権問題の例として岩田さんからあげられた「いじめ問題」について意見を交換した。

西山さんからは、「外見が人と違う」「苗字が変わっている」など、自分たちの持っている概念と違うことでいじめが起こる。メジナという魚を水槽に複数に入れると、必ずその中の1匹がいじめられ、その1匹を別の水槽に移すと、今度は元の水槽の中にいた中の1匹がまたいじめられるという話をテレビ番組で聞き、怒りを感じた。集団の中に自分がいるからといって、その集団の行った行動が正しいとは限らないことを常に認識していきたい。小・中・高校生活では集団意識が強いが、集団と同じ意見だから自分が正しいはずという概念を変えていかないと「いじめ」はなくなる、との意見が述べられた。

金城しおりさんからは、人権とは非常に広い概念だが「人に対する思いやり」「愛」が基本となるものではないかとの意見が述べられ、歌を通じて皆にそれを伝えていきたい、とされた。

比嘉教諭からは、自身が勤務していた首里東高等学校では、人権とは一人ひとりの心の問題だと捉えて、人権フォーラムなどのイベントを開催してきた。西山さんの話にあったように、集団の中で自分を守ろうとしたり、集団の中で自分の存在意義を確認するために「いじめ」が起こる。解決のためには、一人ひとりの考え方が問題であり、いま自分ができることを一つずつしていくことが大切だと述べられた。

また、小海弁護士から、エイズへの偏見やハンセン病患者に対する差別とは一見違うように思えるかもしれないが、今あった話のように、差別問題とは実はとても身近な問題だとわかる。少数者やマイノリティーの方の考えや気持ちを知ることがとても大切だ。自身もハンセン病訴訟や公害訴訟、被爆者訴訟にも関わってきたが、そういったマイノリティーの人々こそ、個性的で、集団の中にいると見えないものが見えている。彼らの考えを知ろうとすることが人権を考えることにつながるのではないか、との意見が述べられた。

金子委員長からは、群馬のハンセン病療養施設を訪ねた経験から、患者らが家族にさえも縁を切られ、凍死者も出るほどの極寒の地で非常に厳しい生活を強いられていた記録について紹介された。

比嘉教諭からは、若い人たちの間でいじめや薬物などの様々な問題があるのも確かだが、ハンセン病やHIVをテーマにした演劇を製作した経験から言えば、その若い人たちが真摯な姿勢で製作や練習に取り組み、劇でとりあげたテーマを実生活でもそのまま実践しようとし、社会奉仕をする意義や喜びをそのまま感じとってくれた。私たち大人は、そういった場を設けることで、可能性や個性、純粋さをもった若い人たちに自分たちの存在や生きる価値を知ってもらうことが大切だ、と述べられた。

また、今年9月22日にはルネ小平での人権フォーラム開催のためにNPO法人「HIV人権ネットワーク沖縄」のメンバーが上京するが、たとえ1200名収容の大ホールで50名しか来場者がいなくても、その50名に私たちのメッセージが深く伝わるよう努力したい、との抱負が述べられた。

また、金子委員長から、いじめなどへの学校教育現場での対処について質問され、比嘉教諭からは、一人でも「いい教諭」がいれば、その教室は確実に変わる。教諭が大切なことをきちんと子どもたちに伝えていけば、子どもはそれに応える力やモチベーションを持っている。卒業式で大人たちが「社会に負けるなよ、がんばれよ」と言うのは、生きていく中で辛いこと・大変なこと・難しい人間関係があっても、子どものときに持っていた純粋な思いや友達を大切にすること、夢をあきらめないといったことを伝えたいのではないかと。大人たちの頑張りや、子供たちに何かを伝えていこうという熱意は、子どもたちの心に通じるだろうと回答された。

また、それは教師だけではなく、多くの大人が取り組むべきことであり、人権問題もまた「いま自分自身にできることは何か」を考えて少しずつ歩いていくことが必要であり、今日こういう場が設けられたことで私自身もその思いを新たにしたので、皆さんも一緒に頑張っていきましょう、と会場に呼びかけた。

最後に金子委員長から、ハンセン病などの勉強をしている都内の高校を訪れた際に目に触れた「自分は自分のために勉強していると思いついていたが、自分の勉強は、そこで得た知識を他人のために役立てるためのものだ」と知った。卒業前にそれがわかって、本当に良かった」という高校生の感想文が紹介され、自分がいま知らないことを知ることが第一歩であり、そこから考えること、自分にできることから始めるのが大切だという思いを胸にこれからも頑張っていきたい、と締めくくられた。

* * *

コンサートでは、演劇「希望の詩」の出演者で現在はシンガー・ソングライターとして沖縄県内のテレビCFタイアップ曲やラジオ等で活躍中の Siori さんによる楽曲 「約束」「Smile」が披露され、盛大な拍手をもって散会した。